

## 必勝祈願 星野阪神タイガース

毎年三月になると、近所のタイガースファンから「今年はいつ?」と聞かれます。『タイガースの必勝祈願は』という主語が抜けてもこの時期の恒例行事といえど、「今年は〇〇日です」とすぐに答えられます。



球春を間近に控えた三月二十五日午前九時三十分、境内に

「六甲おろし」が鳴り渡るなか、阪神球団役員を始め、猛虎ファン待望の闘将星野監督率いる選手達が参拝に訪れました。

なかでも、今年こそ優勝を担うべく阪神タイガースに焦がれて入団したあの金本が、伊良部が、下柳に

野口が縦縞のユニホームを纏い、井川・浜中等のナインに混じり祝詞を聞き入る様に、ああ、今年は優勝戦線に絡むのは無論のこと、それ以上結果に期待を膨らませてくれるムードを選手達の後ろで見ていた多数のファン等も感じ取っていたのではないか。

球春を間近に控えた三月二十五日午前九時三十分、境内に「六甲おろし」が鳴り渡るなか、阪神球団役員を始め、猛虎ファン待望の闘将星野監督率いる選手達が参拝に訪れました。なかでも、今年こそ優勝を担うべく阪神タイガースに焦がれて入団したあの金本が、伊良部が、下柳に野口が縦縞のユニホームを纏い、井川・浜中等のナインに混じり祝詞を聞き入る様に、ああ、今年は優勝戦線に絡むのは無論のこと、それ以上結果に期待を膨らませてくれるムードを選手達の後ろで見ていた多数のファン等も感じ取っていたのではないか。



**夏越しの大祓**

知らず知らずのうちに身についた穢れを六月と七月の末日に行われ大祓式祓い清め厄難を避けます。六月の大祓式は、「夏越しの大祓」といわれ、暑い夏を越すために久くどいわれば、暑い夏を越すために久くどいもののです。人形に氏名と年齢を記入され、所定の作法で厄をお移し下さい。六月三十日まで人形をご返納頂ければ、大祓式でお祓いを致します。



## 社務日記

マイクロフィルム・デジタル化に際して

当社に残されている元禄七年(六九四)よりの社務日記およそ二〇〇冊をこの度マイクロフィルム及びデジタル化する事となりました。マイクロフィルム・デジタル化することにより瞬時に年月による検索が行えるようになります。これにより保存、管理はもちろんのこと多方面での有用な資史料となることでしょう。

**お知らせ**

今号表紙の絵柄は、江戸時代に編纂された当社の年中行事を絵巻物で綴った「西宮大神本紀」の図をもとにイメージ作成したもののです。

編集室から

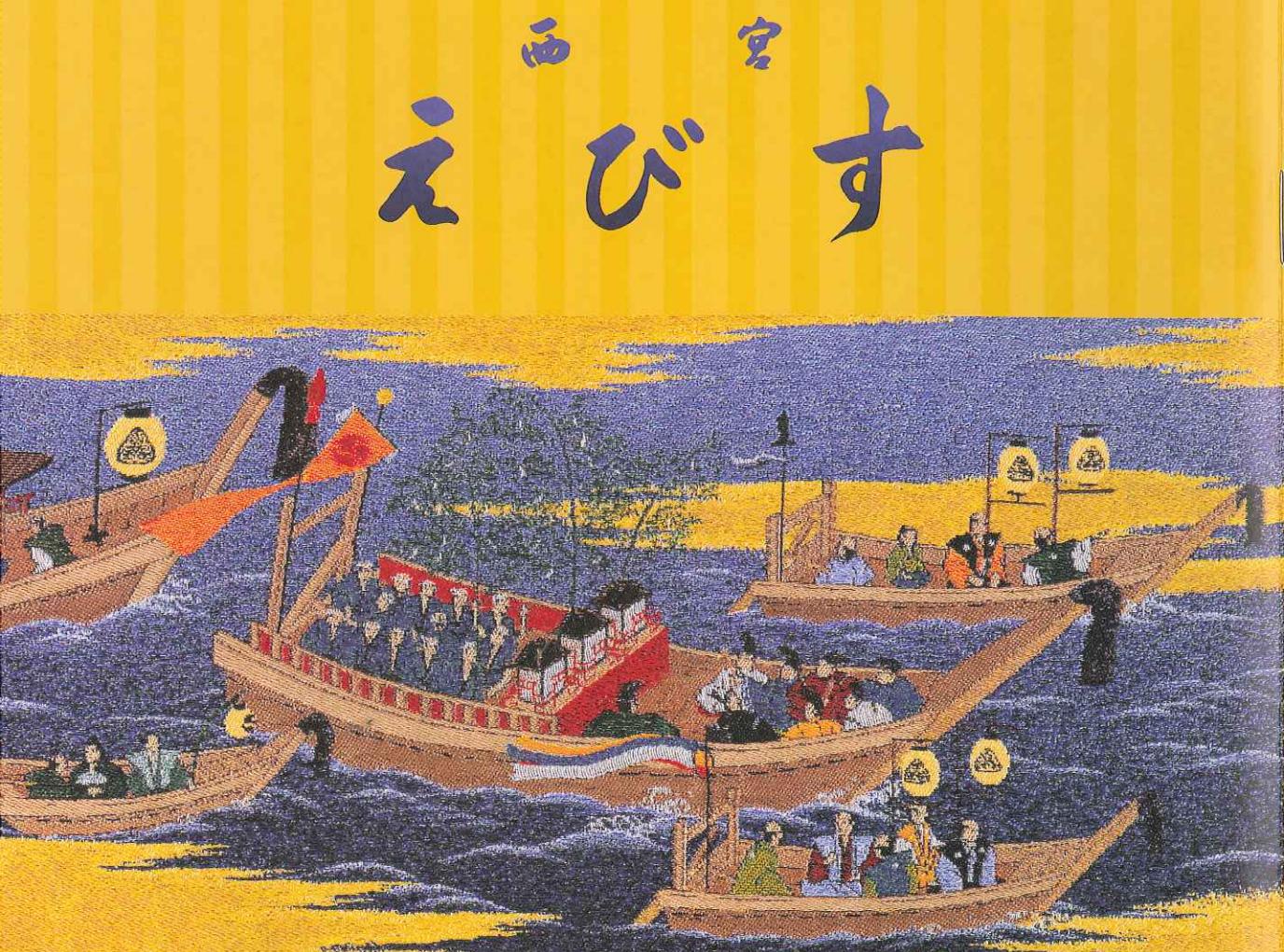
**講社のご案内**

阪神間の中心地・西宮にありながら緑深いえびすの森に鎮まる西宮神社は、福の神總本社として古来より親しまれています。その御神徳は、全国津々浦々にまで広がり、各地で「えびす講」が作られました。当社では、これらをまとめて、どなた様でも入っていただける「日供講社」と「本えびす講社」として運営を致しております。

日供講社 神前に朝夕のお供えとお誕生日に祈祷を致します。

正講員 請金年額 五〇〇〇円  
梅講員 一〇〇〇円  
竹講員 三〇〇〇円  
松講員 三〇〇〇円

約四〇〇年前に途絶えていた祭典が復興再現できたのは、「西宮大神本紀」などの記述が継承されてきた影響が大きいのでしょう。それと同じように連綿と書き綴られ、所蔵されてきた社務日記を見つめなおすことで、今の世に忘れられた何か新しい発見や今後に資するものがきっとあることでしょう。(希)



平成15年  
夏号

EBISU  
SCOPE

平成15年 夏号

西宮えびす平成15年夏号(通巻第19号) 平成15年6月1日発行  
発行/西宮神社 TEL 06-621-0974 兵庫県西宮市社家町1-17 FAX 0798-333-10321

編集/総務課広報 印刷/小西印刷所

# まつりの賑わい

夏の風物詩として、今年も各地でお祭りがきかんになろう。

しかし、神社のまつりから広く商店街の大卖出しにいたる

「〇〇まつり」と名のつくようなものまで含めると、その数の多いのに驚く他はない。

これからまつりは「まつり」の用語の氾濫とともに、神の存在しないまつりも生れてくるだろうが、

短時日に消滅する事実を考えてもなくてはならない。

新しい時代に対処してゆくには、まつりの意義とか精神とかは、それ自体の中だけに求めるべきでなく、

さらに広い視野のものに、まちづくり、人づくりにつながるその波及効果こそが注目されなければならないと思う。

それには若者の理解と力が必要であることは、うまでもない。

## 西宮まつり

### 9月21日宵宮祭

西宮まつりの開催を奉告し、ご例祭の無事斎行を祈願する宵宮祭が行われた後、各地区で作った三十二基にものぼる子供樽みこし・西宮神社氏子青年若戎会のだんじりが浜脇中学校のプラスパンド・バトンアラーを先頭として西宮中央商店街を中心に西宮神社周辺を元気に練り歩きます。

- 宵宮祭 午後五時
- 子どもみこし 午後五時三十分
- 子どもみこし 午後五時

### 9月22日西宮神社例祭

午前十時より本殿にて古式に則り厳粛裡に例祭が斎行され、午後からは神社周辺を稚児行列やだんじりが巡行。夕刻には境内特設ステージにおいて演芸の奉納等、趣向を凝らした様々な神賑行事が行なわれます。

- 例祭 午前十時
- 稚児行列 午後二時
- だんじり巡行 午後四時
- 奉納演芸 午後六時

### 9月23日みこし渡御

みこしに神様をお遷しし、童男・八乙女・供奉行列と共に午前中は神社周辺を巡幸する陸渡御が、午後は新西宮ヨットハーバーから飾り船に乗り、海上を巡幸する船渡御が行なわれます。平成十四年より和田岬の和田神社と三石神社への産宮参りが行なわれるようになりました。

- 発輿祭 午前十時
- お旅所祭 午後十二時二十分
- 出港 午後二時
- 入港 午後三時三十分
- 還御祭 午後四時半

雄神に連なる海上渡御



風祭斎行



十二単衣をまとった八乙女



町内を練り歩くみこし行列



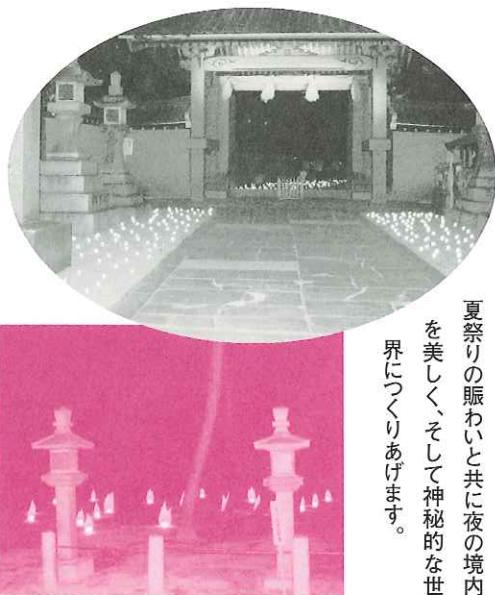
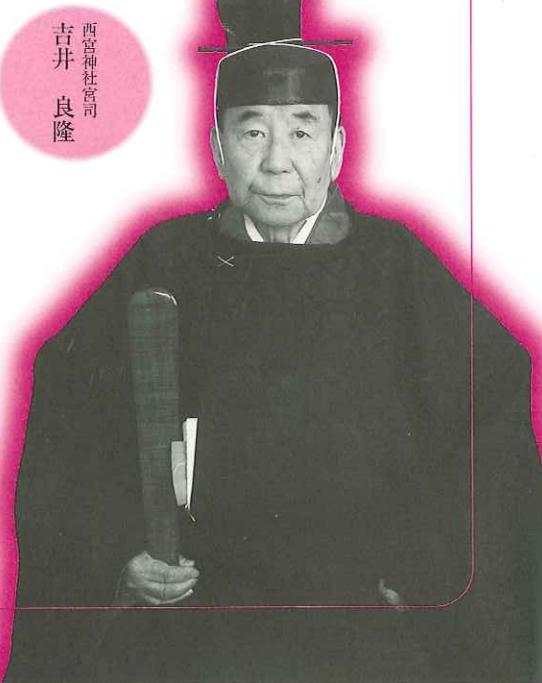
十二単衣をまとった八乙女



子ども樽みこし



吉井 良隆  
西宮神社宮司



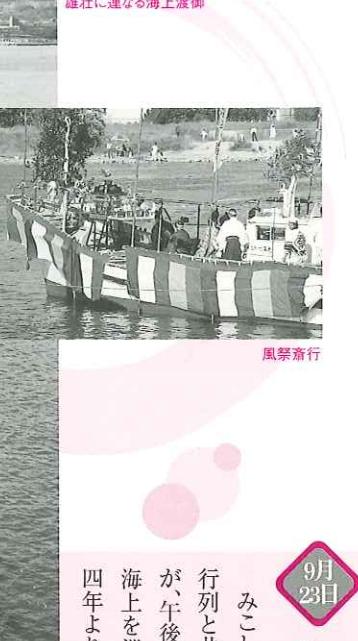
夏祭りの賑わいと共に夜の境内を美しく、そして神秘的な世界につくりあげます。

午前十時から夏祭りが本殿で斎行され、引き続き拝殿前にて巫女による暑氣払いの湯立神樂が奉納されます。午後六時半よりえびす萬燈籠点灯式が斎行されます。神職からご神火がハッピ姿の西宮神社氏子青年若戎会の会員や氏子町内の子供会の方々に手渡され、境内内外の石燈籠約三百基をはじめとしてローソク燈籠二万個あまりに点火され、



原笙会主宰 原 笠子さん

拝殿前の特設舞台では、神賑行事として世界各地で講演を重ねられている女人舞楽・原笙会により舞楽が奉納されます。これまで男性によって舞われていた舞楽を渡来の原点に返り、女性による華麗な舞いの再興をめざして昭和六十年に原笙会を発足されました。正当な舞楽の伝承・発展を願い、寺社でのご奉納、世界各地での公演を重ねる傍ら、継承者の養成、装束製作の技術修得なども行っています。



風祭斎行



風祭斎行



風祭斎行

# 諸国講社の今昔

全国に広がる「諸国講社」。

歴史の移り行く様子を分布状況を交えながらご紹介します。

島大宮神社



## 諸国講社について

当社のご祭神であるえびす様は、福の神様として、鎌倉・室町時代には文献や謡曲、狂言に語られ、全国の崇敬の方々におまつりされてきました。

これらの由緒によりまして、江戸時代の寛文三年（二六六三）に四代將軍徳川家綱公がご造営された社殿の維持修復料にあてるために、古来より発行されてきた御神像札に版権が許可され、独占的に頒布することが認められました。

年毎に社勢は東山道、東海道、北陸方面また遠く東北地方にまで普及し、多数の崇敬者があつたことを窺い知ることができます。千七百年代の元文・寛保・宝曆・明和年代の本社神主家発行の免許状を先祖より受け継がれ、今日に至るまで配札を続けておられる方もあります。

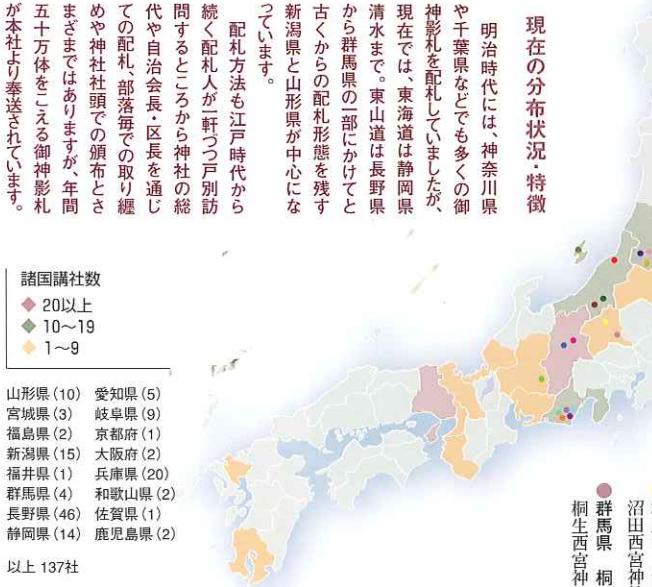
明治維新を迎える藩体制が変革し、從来の方法での配札が困難になつきましたので、全国各地の配札人、崇敬者からの要望により、明治十二年に内務省認可の西宮神社教院が本社に、西宮教会地方本部、講社事務取扱所が各地に設置されました。明治十六年には、神社付属の西宮講社して改組され、社用係を通じて、本社より奉送する御神影札を頒布するという現在の諸国講社の制度が整いました。

明治二十年代以降、各地で御分靈奉斎の氣運が高まり、明治二十八年岐阜県中津川西宮神社が、明治三十四年には群馬県桐生西宮神社などが建立されました。分靈の条件として、神符の本社よりの申し受けが行われば、本社直授の御神影札を祭礼日に社頭でも広く頒布されるようになりました。

明治二十四年には内務省登録九一八〇号をもつて版権を再び得、透かし入りの特別の御神影札として今まで全国に頒布しています。

## 明治以降

### 現在の分布状況・特徴



明治時代には、神奈川県や千葉県などでも多くの御神影札を配札していましたが、現在では、東海道は静岡県から群馬県の部にかけてと古くからの配札形態を残す新潟県と山形県が中心になっています。

配札方法も江戸時代から続く配札人が二軒づつ戸別訪問するところから神社の総代や自治会長・区長を通じての配札、部落毎の取り纏めや神社社頭での頒布とさまざまではあります、年間五十五万体をこえる御神影札が本社より奉送されています。

## 江戸期

### 当時の分布状況



江戸時代の御神影札

\*寛政一年（1790）11月に寺社奉行所に提出した  
西宮支配下関東筋別帳による

武藏國	12人	信濃國	41人
相模國	12人	上総國	70人
駿河國	4人	下総國	41人
安房國	22人	陸奥國	95人
甲斐國	6人	下野國	34人
越後國	19人	越後國	19人

合計479人が記されています。

### 御神影札一万里以上授与



年本町三丁目一帯で大火があり、これで西宮参りが盛んに行なわれるようになりました。

明治二十一

年

桐生西宮神社は、本社直系分社として、明治三十四年十月、桐生ヶ岡公園に接する延喜式内社・美和神社の境内に御祭神・大物主命(だいこくのみこと)の相殿神(同格主神)として分靈勧請されました。当社を関東一社と称するのは、関東地方においてえびす様の御祭神を蛭子大神とするのは当社だけで、他は事代主命をおまつりした神社であることから区別する意味が込められています。

織物の町桐生とえびす信仰の関わりは古く、江戸時代には農家や商家での通俗的なえびす講の行事やえびす講前市が開かれています。明治に入ると西宮本社代物取引が組織され、織物取引を兼ねた講前市が開かれています。

## 関東一社 桐生西宮神社

(群馬県桐生市宮本町鎮座)

諸国探訪

①

### 桐生えびす講【11月19日・20日】

上州に初冬の訪れを告げる桐生西宮神社の秋季大祭。歩行者天国となった神社周辺の参道には500軒以上の露店がずらり。不景気を吹き飛ばして「福」をかき込む縁起物の熊手やお宝を求める30万人以上の参拝者が駆け足ります。



★祭礼期間中は、ホームページでお祭りの様子を生中継でご覧頂けます。

※桐生西宮神社のホームページ <http://www.kiryu.co.jp/nishinomiya/>



大矢 悅子さん

今から十五年前、

当社福籠授与所にて巫女奉仕をされ、  
当時の経験や現在の心境などをつづった

エッセー「福娘その後」が

産経新聞「夕焼けエッセー」に掲載されました。

そこで大矢悦子さんにお話を伺いました。

今回投稿は初めてで、えべつさんに行ったら  
わけも無く書きたくなりました。今の気持ち  
を「かく」ということで形にし、誰かに伝え  
られたらすべての物事がうまく行くような  
気がしました。実際書いてみるととても気持ち  
がすっきりしました。

また、産経新聞「夕  
焼けエッセー」月間  
賞にも選ばれてびっ  
くり。嬉しうれしか  
といったところです。  
新聞を見て昔の友  
人から電話があつた  
り、思いがけないお  
まけつきでした。

産経新聞掲載、「夕焼けエッセー」より全文抜粋  
(平成15年1月20日・夕刊)

一月十日、十五年ぶりに十日戎で賑わう  
西宮神社へ行つた。

実は以前、福娘として三日間をこの神社で  
過ごしたが当時は京都の学生で、春から大  
阪で働くことになつており、それ以降、神社  
を訪れる事はなかった。

阪で働くことになつており、それ以降、神社  
を訪れる事はなかった。

まじめに努力はするものの、折からの不  
況で客足は思うように伸びず、借金も増  
える一方。そうなると「ここぞばかりにえ  
べつさんへ神頼みである。

前回は福娘として、どちらかといえば客  
観的に押し寄せる参拝の人々を見ていた。

三ヵ月後から始まる新社会  
人生活と、その後に訪れるで  
あろうはずの幸せな家庭生  
活に甘い期待を持ちつつ、「あ  
ら」というおばさんんに笑顔で  
福籠を渡したりしていた。

しかし、今回は間違いなく  
最も真剣な参拝者の一人。お  
んなが一番福をくれそうだから  
「あら」というおばさんんに笑顔で  
福籠を渡したりしていた。



## 福娘その後

サラリーマンの家庭に育ち、商売  
繁盛より良縁祈願に閑心が高か  
つたのも御無沙汰の理由である。

あれから十五年、会社を三つ変わり、海外  
留学するなど勝手気ままに過ごした末に、  
去年、レストランを経営し始めたばかりの  
福娘から福籠を貰つた。

私は今、社会へ出て世間の厳しさを学び、  
世の中渡つていくのは本当に甘くないと痛  
感している。でも私、福娘だったんだから、  
えべつさんもちょうどは思い出して、ええよ  
うにして下さらないかしら。

## 兵庫津太々御神楽講への勧進

抑西宮恵美酒太神と崇奉願ハ伊弉諾伊弉冉二尊第三の御子蛭子尊尔て



おはしまして日本一豊土徳の大福神也。夫大古五行水火木金能親たる故  
万物生々する本之土乃徳を備へ御守護満々ます大祖の太神尔て所謂士農  
工商漁獵に至まで福寿円満海上安全能長久を授與志たまふ御神徳普く  
諸人信仰の輩ハ判然たり。猶御神驗を祈らむ尔は神樂を奏し奉祭に志  
くハなりとそ故にこたひ永代無邊太々御神樂執行嘗たく□記世話方□て  
大講の志願たり候依之當御津一國家業繁榮子孫長久海上安全能御祈祷  
のため御加講頼入の勧進を希而已

板之英江

西宮世話人

西宮世話人  
兵庫津御太々御神樂講  
松井源助  
小上馬伊八  
當合久右衛門  
雜賀屋六兵衛  
濱屋卯兵衛  
八馬善兵衛

兵庫津世話人

これは文政九（1826）年に西宮の年貢を始めとして主だった氏子の方々が、兵庫津（神戸）で米屋仲、干鰯仲などの諸人に對し、西宮社での太々神樂祭の斎行にあたつて「兵庫津御太々御神樂講」への入講を勧進する書である。兵庫津と西宮は港を中心とした諸業繁榮の地であり、明和六（1769）年にも天領となつた。これより前の正徳年間（1711～1715）には既に当社より兵庫津へは正月の御祈祷札や御像札が届けられており、この明和年間よりそれが恒例行事となつたようだ。また安永四（1775）年には「兵庫津講中への年礼」と講も組織されていた。この他にも文化五（1808）年には「兵庫津塙物問屋山田屋茂左衛門方」へ当社御掛納并正月中の御膳の御魚の調進を依頼している。この加講勧進の書が出された前年には、二十二年目毎の御開帳が賑々しく執り行われ社勢も大いに盛り上がり、その行動力がえびす信仰の原動力の一つであったといえよう。そしてこの時期の兵庫津と西宮との結びは、文政の世の海上渡御祭（西宮まつり）再興として結実したのである。